



瀬田の丘

創刊 1973年

編集・発行／カトリック瀬田教会信徒会広報部
東京都世田谷区瀬田 4-16-1



今日のみことば

年間第12主日 B年 (2021年6月20日)

瀬田教会主任司祭 小西広志神父

第一朗読：ヨブ記 38章1、8—11節

第二朗読：コリントの信徒への手紙二 5章14—17節

福音朗読：マルコによる福音 4章35—41節

テーマ：海、嵐、そして悩み苦しむ

三つの朗読から

第一朗読は『ヨブ記』の一節です。人はなぜ苦しむのか？ これが『ヨブ記』のテーマとなります。全身にでき物ができたヨブは苦しみます。そんなヨブに向かって、三人の友人たちは罪を認めて神さまにゆるしを願うようにと勧めます。因果応報で苦しみを理解している友人たちと、罪を犯したことがないと主張するヨブとの間で議論が生じます。両者は隔たるばかりです。ヨブの嘆き、友人との議論、再び嘆きの独白と繰り返された後、それまで沈黙を守ってきた神さまが、突然「嵐の中から」（1節）ヨブに直接語りかけます。今日の朗読箇所は神からの最初の語りかけの場面です。神の創造のわざと被造物全体におよぶ神の支配が語られています。海の誕生の時に、神が助産婦のように立ち合い、海に限界を設けたというのです。9節にあるように生まれ出た海に、神さまは密雲という着物を着せ、濃霧という産着をまとわせます。一度荒れ狂った手のつけられない力を秘めた海といえども、神さまからすれば赤ちゃんに等しいものなのでしょう。

第二朗読ですが、『コリントの信徒への手紙二』には、パウロが体験した苦難が背景にあるようです。パウロは、死は終わりではなく、「永遠のすみか」へと至るために必要な出来事として理解しました。そこで死を恐れることなく宣教します。その態度は常軌を逸したものに見えたかもしれません。「正気でないとするなら、それは神のためであった」と今日の朗読箇所の直前に記されています（13節）。

福音朗読は、先週の朗読箇所の続きです。先週の朗読では神の国の秘密がお弟子さんだけに与えられていることが示されました（33—34節）。そして、今日の朗読ではイエスさまとお弟子さんたちが群衆から離れている場面での出来事です。おそらくイエスさまは、お弟子さんたちに神の国の秘密を教えようとなさって「向こう岸に渡ろう」（35節）と呼びかけたのでしょう。しかし、湖に突風が起り、舟の行く手をふさぎます。

説教

福音のお話を理解する上で、「海」の持つイメージをあらかじめ知っておいたらよいかもかもしれません。ギリシア語では「海」も「湖」も同じ言葉です(サラッサと言います)。ですので、今日の福音に登場する「湖」はガリラヤ湖のことですが、「ガリラヤの海」と呼ばれていました。聖書では「海」のイメージは悪の象徴です。なぜなら、ひとたび波が激しくおこると、舟も人も呑み込まれてしまい、もう二度と帰ってこられません。しかも深い海の底は真っ暗な闇です。旧約聖書では海にはラハブという得体の知れない生き物が住んでいると考えられていました。海には悪魔的なものが棲んでいるのです(黙13章1節参照)。『黙示録』には「もはや海もなくなった」(21章1節)とあります。悪魔的なものが潜む海が、救い主キリストによってもたらされる「新しい天と新しい地」(同)にはもはや存在しないことが示されています。海の持つ力は、人間を捕らえ、闇に引き込んで滅ぼしてしまう力の象徴です。

そんな「海」にイエスさまとお弟子さんたちは漕ぎ出していきます。「激しい突風が起こり」(マコ4章37節)とあります。嵐のことで、第一朗読にも嵐は登場します(ヨブ38章1節)。嵐は神さまの顕現、威厳、威光を表します。その嵐の中で神さまはヨブだけに話しかけます。嵐はヘブライ語ではセアラですが、元々は暴風、つむじ風、竜巻の意味があります。嵐は人間がコツコツと築きあげてきたものを一瞬にして吹き飛ばし、破壊してしまう力を持っています。つまり人は嵐という大自然の力に襲われた時に、初めて自分の力のなさ、弱さを自覚するのではないのでしょうか。つまり、嵐によって表された神の権威は、人間のちっぽけな財産や誇りすらも取り去ってしまうのです。しかし、第一朗読を味わってみると、その嵐の中から語られた神さまのことばによって、少しずつヨブの心の中に変化が生まれていきました。

「海」という悪魔的な力、「嵐」という神の力に挟まれて、舟は漕ぎ悩みます。波に翻弄され、突風と雨に見舞われて、お弟子さんたち一行は恐怖にかられ、どうしたらよいものかと悩み苦しみます。「先生、わたしたちがおぼれてもかまわないのですか」(マコ4章38節)は、困難な状況で苦しみ、解決策を失って悩んでいる人間の現実から生まれた言葉です。人は悩み苦しみます。一方で神の恵みがあると信じていながらも、他方で深淵へと引きずり込もうとする悪の力に負けそうになりながら。

37節での「突風」、「波をかぶる」、「水浸し」と騒がしい描写とは対照的に、イエスさまは眠っておられます。とても静かな様子です(38節)。お弟子さんたちは、イエスさまに助けを願います。イエスさまの静かな心とは対照的にお弟子さんたちの心は騒ぎ立っています。「先生、わたしたちがおぼれてもかまわないのですか」(38節)は、お弟子さんたちの叫び声ですが、「わたしたち」とは誰のことを指しているのでしょうか？ もし、イエスさまも含んでお弟子さんたちが「わたしたち」と叫んだとしたら、彼らのイエスさまへの理解は不十分です。浅いと言えるでしょう。

「黙れ、静まれ」(39節)と、ご自分の言葉で波を静め、穏やかな「海」としてくれたイエスさまに信頼して、悩み苦しみながらも生きていくようにと今日の福音はわたしたちに勧めています。